



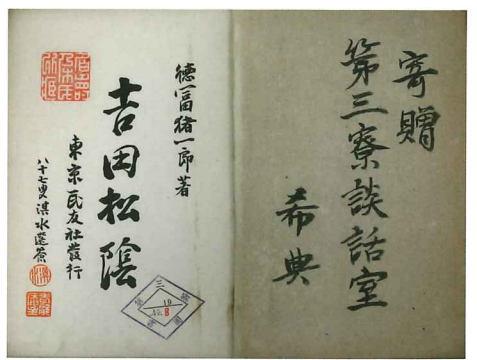
# 中朝事実：昭和天皇に受け継がれた教え

## 乃木希典からの寄贈書

乃木は若くして、玉木文之進(1810～1876)に師事し、山鹿素行(1622～1685)や吉田松陰(1830～1859)に私淑していた。玉木は山鹿流の兵学者であり、また松陰の叔父でもあったからである。なお乃木の実弟が玉木の養子となったので、乃木と松陰は親戚関係にあったともいえる。本稿では乃木自身、およびその遺族が学習院に寄贈した素行、松陰にかかわる書物を2冊紹介したい。

### ❖『吉田松陰』

明治26年(1893)、徳富蘇峰(1863～1957)が著した吉田松陰の伝記。その表紙見返しには、「寄贈／第三寮談話室／希典」とある。「第三寮」は、目白校地の竣工当初より建てられていた学生の寄宿舎(第六寮まであった)の一つ。乃木は、自らが私淑する吉田松陰について、広く学生に知らしめるべく、該書を寄贈したのである。



『吉田松陰』〔学習院アーカイブズ蔵〕

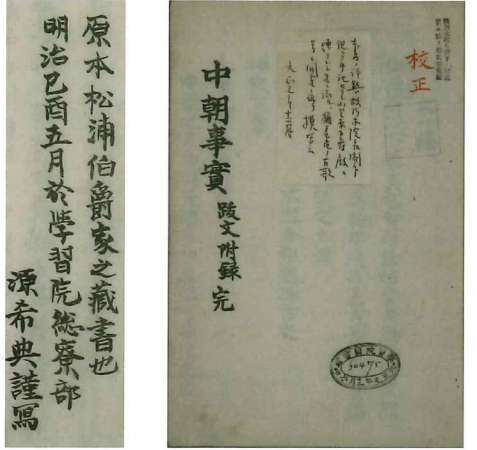
### ❖『中朝事実』

『中朝事実』は、江戸時代初期の儒学者、山鹿素行が著した歴史書。儒教のいう「聖人の教え」が実践されているのは、万世一系の皇統を有する日本であって、我が国こそが「中朝(中華)」と称するにふさわしいと提唱する。

乃木希典はこれを座右の書とし、戦地にも携行していた。明治42年(1909)、乃木は「総寮部」(現・乃木館)において、その全文を手写し、それを石版印刷のうえ自費出版した。またこの書は、『中興鑑言』(下のコラムを参照)とともに、明治天皇の大喪に際して、乃木が自刃する数日前、通宮裕仁親王に献呈したことも知られている。

そもそも乃木は、裕仁親王の初等学科入学を見据えて、学習院長に任ぜられた。したがって学習院長としての乃木は、裕仁親王の成長とともにあったとも言える。乃木は裕仁親王への最期の教えとして、皇室を中心とした日本の伝統を伝える意図のもと、これらの書を奉獻したのである。

昭和天皇(裕仁親王)は晩年になっても、自分の人生において最も影響を受けた人物は乃木であると語っている。この『中朝事実』には乃木直筆の朱批が施され、末尾に和歌2首が書きつけられている。加えて「小笠原長生(1867～1958)に贈呈されたものであろう。さらに該書の冒頭には「故乃木院長閣下ノ御遺言ニ依り伯爵家寄贈」とあり、また「大正元年(1912)12月6日」の受入印が捺されていることから、乃木の死後ほどなく学習院に寄贈されたものと窺える。



『中朝事実』〔学習院大学図書館蔵〕

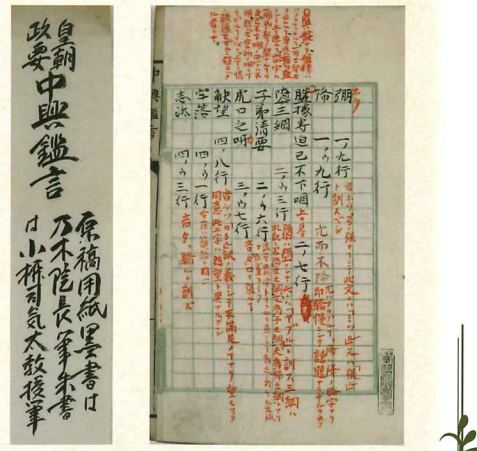
(客員研究員・中嶋諒)

## コラム 乃木希典と小柳司気太

江戸時代中期の儒者、三宅観瀾(1674～1718)が著した『中興鑑言』もまた、乃木が手写し、自費出版した書物である。これは建武中興における後醍醐天皇の得失を批評したものであるが、学習院大学図書館には、乃木旧蔵の江戸期の版本も収められている。

さて該書で注目したいのは、乃木が、当時学習院教授であった中国哲学者小柳司気太(1870～1940)に宛てた原稿用紙が添付されていることである。ここでは乃木の疑問点が墨書で、それに対する小柳の回答が朱筆で記されている。小柳は乃木の死後、「余は是まで色々校長の下にあつたが、コンナ勉強家は、未だ見たことはない」(『丁酉倫理会倫理講演集』122、1912年)と述べているが、その言葉通り、乃木の学問に対する姿勢には目を見張るものがあつた。

(客員研究員・中嶋諒)



『中興鑑言』添付の原稿用紙〔学習院大学図書館蔵〕



# 明治の終焉と乃木希典が遺したものの

## うつし世を神さりまし、大君のみあとしたひて我はゆくなり

—乃木希典 辞世の句



渡辺長男原型制作／岡崎雪聲鑄造 乃木希典胸像 大正元年〔学習院アーカイブズ蔵〕

明治45年(1912)7月、明治天皇の御不例を知らせる電報を受けて、乃木はすぐさま宮中へ参内し、以降日々参内を続けた。天皇の崩御にともない、7月30日、元号は大正と改められた。

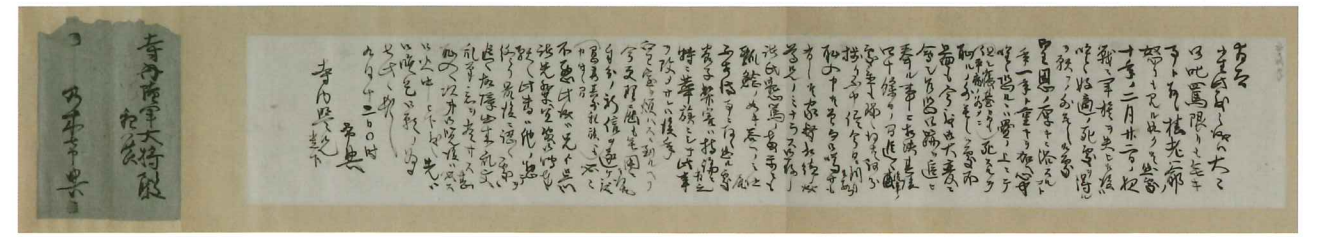
大正元年9月13日、明治天皇の大喪儀が青山練兵場において行われた。午後8時、明治天皇の棺が宮城から出発する号砲とともに、乃木と妻静子は赤坂の自邸において自刃したといわれる。その報せはすぐに青山と学習院にもたらされ、まもなく号外が配られ、翌日からは新聞各紙が大きく報じた。この自刃は「殉死」とも称され、多くの人々に衝撃を与えた。

乃木邸での通夜は大変な混雑で制限が敷かれたため、学習院学生らは乃木が起居した総寮部で通夜を行った。葬儀の当日、葬列には学習院の学生らも棺に従い、あるいは勲章奉持者の付き添い役などを務めた。皇族や、来日した英国のコンノート親王など多くの会葬者が訪れる中、荘厳な式が執り行われた。

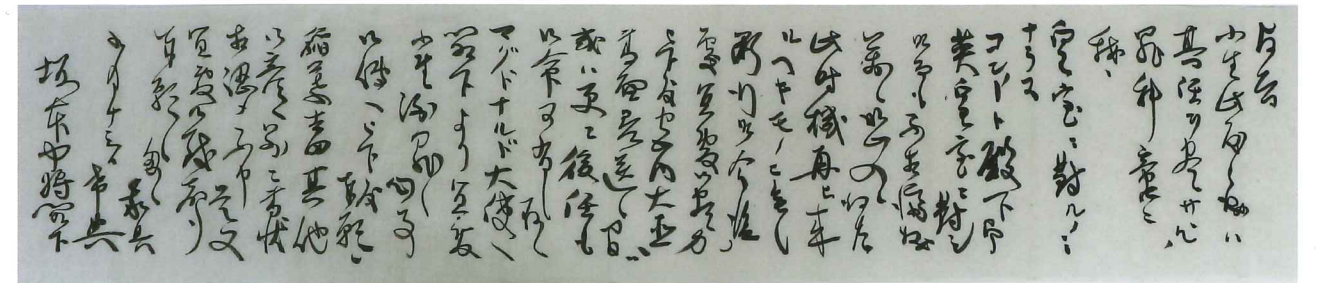
乃木の没後は、全国に乃木神社が建立されるなど、乃木の顕彰活動が起こり、学習院では『乃木院長記念録』や『乃木院長記念写真帖』が編纂された。

乃木は自刃にあたり、親族や陸軍・学習院関係者らに宛て、複数の遺書を書きのこしている。その遺志により学習院には、乃木の院長在任時の皇室からの下賜品や、愛用品・図書などが寄贈された。これらの品は、当時の学生や教職員が語るエピソードとともに、教育者としての学習院長乃木希典の姿を、確かな輪郭をもって描きだしている。

(学芸員・吉廣さやか)



乃木希典筆 寺内正毅宛遺書 大正元年9月12日付〔当館蔵〕



乃木希典筆 坂本篤俊宛遺書 大正元年9月13日付〔当館蔵〕